

## アドルノ「哲学のアクチュアリティ」における近代性 ——哲学と文学の親和性について——

堀田 明

### はじめに

ゲオルク・ルカーチが『小説の理論 (Die Theorie des Romans)』において「小説は神に見捨てられた世界の叙事詩である」<sup>1</sup>と定義した時、彼の念頭に置かれていたのは近代叙事文学における自我と世界の分裂状態であった。ルカーチは小説という形式を歴史哲学的に考察することによって、文学上に生じた近代的な変化を明らかにした。作品における登場人物の自我と作品世界の関係は、古典時代においては調和的であった一方、近代に至って両者のあいだに分裂が生じてしまった、という認識が彼の議論の根底をなしている。その原因は主客の関係が陥っている状態に求めることができる。本来であれば主体に対して透徹した存在であるべき客体は、現代において疎遠なものとなってしまう。ルカーチは、文明化の甚だしい進行がもたらした代償として現代人が被った疎外感を、文学に反映された生の問題意識のなかで鮮やかに描き出していく。古代ギリシヤの共同体を満たしていたような親近性は、近代社会のなかに置かれた個々人の関係のうちにはもはや見いだすことができない。かつて文学が自らの内に確固として保持していた全体的な完結性は時代の経過とともに失われ、いまや文学を規定しているのは散文的で断片的な傾向である。このようにしてルカーチは、小説を近代に特有の文学形式として定式化する。

他方、こうしたルカーチの議論をたどっていくにつれてある疑問が浮上してくる。『小説の理論』において目につくのは、ルカーチが小説にたいして終始批判的な眼差しを向けている、という点である。さしあたってそれは、彼が依拠している擬古典主義的な芸術観の表れといって差し支えないだろう。というのも、『小説の理論』の議論には、ギリシヤ芸術に代表される古典主義が理想的なものとして、無批判な形で暗黙の内に前提されているのである。それゆえ、近代において成立した小説から取り出される固有性にたいしては自ずと否定的な判断があてがわれる。小説に認められる断片性や散文性は、もっぱら文学形式の全体性を損ねるものとして槍玉にあげられる。ここでは、小説がもつそうした特性が、近代性を示

---

<sup>1</sup> Georg Lukács, *Die Theorie des Romans*, in: *Werke Band I*, hrsg. v. Frank Benseler und Rüdiger Dannemann, Magdeburg 2009. S. 566. ジェルジ・ルカーチ『小説の理論』原田義人、佐々木基一訳、筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、1994年、108頁。

す肯定的な指標として評価されることはない。ルカーチが示すこうした復古的な態度は、『小説の理論』だけに限られるものではない。『小説の理論』とあわせて、いわゆるルカーチの初期の活動にあたる『魂と形式』や『歴史と階級意識』においても、彼は近代文化・近代社会を批判的に考察している。つまり彼にとって近代分析は同時に近代批判の側面も併せ持っている、といえるだろう。こうしてルカーチは、近代的な——つまり彼にとっては問題的な——文学形式である小説にたいして「半芸術 (Halbkunst)」<sup>2</sup>の烙印を押すこととなる。擬古典主義的な立場をとることによって、ルカーチは小説の近代性をめぐる議論のなかで盤石な基盤を獲得することができたのだが、他方でその判断において中立的な立場を犠牲にしてしまった。結果的に、小説という形式を、近代的な精神的・文化的状況を忠実に反映する優れた事例として考察する機縁がルカーチにおいて失われてしまったこととなる。

自我と世界、あるいは主体と客体を議論の中心に据えるこうした問題意識は、文学の領域に限られたものではない。これと同様の事態が哲学の分野においても同時並行的に進行していた。こうした状況に一つの建設的なパースペクティブを提供するのが、テオドル・W・アドルノによる諸考察である。その際、彼が 1931 年と 1932 年に相次いでおこなった講演である「哲学のアクチュアリティ (Die Aktualität der Philosophie)」および「自然史の理念 (Die Idee der Naturgeschichte)」が重要な立脚点となるのだが、ここではまず、「哲学のアクチュアリティ」を取り上げる。近代哲学は、超越論的な理性を自らの思弁の拠り所とすることによって、経験的な事象が構成する現実を十全に把握することを目指したのであるが、最終的にこの試みは頓挫してしまった。このような意味で、近代において哲学が抱えることになった認識論的な危機意識は、先述した文学領域におけるそれと親和的な関係にあるといえる。アドルノは、ベンヤミンから援用した「自然史 (Naturgeschichte)」という概念を導入することにより、理性と現実のあいだに見られた対立が宥和へとむかう可能性を模索する。これらの試みはアドルノの初期の活動にあたるものであるが、ここで提出された諸々のモチーフにはその後も彼によって取り上げられ、生涯を通じて主題となるような重要概念が含まれている。そのようにして紡ぎ出されてゆく彼の思考の歩みは、時代が孕む欺瞞にむけられた鋭い眼差しでもある。

このことから、アドルノにおける上記の観点を文学に適用する試みには、十分な価値を期待することができると思われる。そこで以下では、アドルノが現代哲学の行き詰まりを克服するために提示した歴史哲学的方法を文学的領域に敷衍し、またそれによって近代文学に生じた主体-客体という分裂状況を発展的に解釈するための指針を画策していきたい。

---

<sup>2</sup> Ebd., S. 556. 前掲書, 83 頁。

## 近代哲学の克服

アドルノは、1931年にフランクフルト大学の私講師に就任した際に「哲学のアクチュアリティ」という講演を行っている。全体を通じて問題となっているのは、哲学的認識における理性と現実の関係である。彼はまず冒頭において、当時の哲学が陥っていた窮状について言及する。

こんにち哲学研究を職業として選択する者は、かつてさまざまな哲学的企ての出発点に位置していた幻想、すなわち、思考の力によって現実の総体を把握することができるという幻想を、放棄しなければなりません。現実の秩序と形態があらゆる理性の要求を打ち砕いているのですから、正当化をこととする理性がそのような現実のなかで自分自身を再発見することなど不可能でしょう。<sup>3</sup>

ここで真っ先に念頭に浮かぶのは、理性による現実の獲得を構想したヘーゲル哲学への批判だろう。上述の引用が、ヘーゲルによって企てられた体系哲学を意識したものであることは、アドルノの言葉遣いからも明白である。絶対精神の弁証法的な発展によって現実を充足させようとする試みは、「思考の力によって現実の総体を把握することができるという幻想」として引導を渡される。理念と現実のあいだに架橋不可能な深淵が生じることとなる。ここで、ルカーチが『小説の理論』で深刻視していた問題が想起されてもよいだろう。それは、近代文学において顕在化した、自我と世界のあいだの深淵である。自律的な理性から出発して現実の全体を獲得しようとするヘーゲル哲学の挫折は、孤独にさらされ世界から疎遠なものとなった小説の主人公の姿と重なる。このように、哲学と文学の両分野にみられる現象にはすでに認識論的な近親性が見られる。

話をアドルノに戻すと、彼は冒頭の引用においてヘーゲルだけを問題としているのではない。アドルノは、ヘーゲルに代表されるような観念論的哲学が前提としてもっている問題設定そのものが限界を迎えていることを主張しているのである。彼の批判は、ヘーゲル一人のみならず、より広範にわたる哲学的領域を射程に収めている。後の議論を先取りするならば、哲学はいまや、自律的な理性によって現実全体を把握しようするような大きな問いを放棄し、それに代わる新たな問いを模索しなければならないのである。アドルノは次のように述べる。「ですから、支配的な哲学的思考を根底的に批判することが、第一の課題、最もアクチュアルな課題の一つだと思われます。」<sup>4</sup> ここにきて、アドルノが講演の表題のうちに

---

<sup>3</sup> Theodor W. Adorno, *Die Aktualität der Philosophie*, in: *Gesammelte Schriften. Philosophische Frühschriften*, Bd. 1, hrsg. v. Rolf Tiedemann unter Mitwirkung von Gretel Adorno, Susan Buck-Morss und Klaus Schultz, Frankfurt am Main 1997, S. 325. テオドール・W・アドルノ『哲学のアクチュアリティ』細見和之訳、みすず書房、2011年、2頁。

<sup>4</sup> Ebd., S. 339. 前掲書、28頁。

意図していた、哲学のアクチュアルな問題の一つが明らかとなる。それは、主に近代を通じて行われてきた哲学のあり方を顧み、さらに自らの時代の置かれた状況にふさわしい形で新たに捉え直すことである。それゆえ、ヘーゲル以降においてもなお観念論的な立場から理性と現実の架橋に努めているあらゆる哲学は、挫折した試みを虚しく反復しているに過ぎないものとして批判にさらされることとなる。その対象は、マールブルク学派と西南ドイツ学派からなる新カント学派、ジンメルによって展開された生の哲学、あるいは、フッサールにより創案されシェーラーへと受け継がれた現象学、など多岐にわたっている。しかし、同時代の哲学のなかでアドルノが最も問題視していたのは、マルティン・ハイデガーによる存在論である。

同時代の他の哲学者たちに比べて、アドルノがハイデガーをひととき厳しく糾弾するのには理由がある。それは、アドルノが自らの構想する非同一性の哲学を展開していくにあたって克服しなければならないと自負している問題の一部が、ハイデガーが展開した存在論的思弁によって覆い隠されてしまっているからに他ならない。このことは、主に『存在と時間』を中心として行われた、存在に対する問いの立て方と関係している。その際ハイデガーは「被投性」という概念を導入することによって、客観性の領域を主観的な存在へと従属させてしまう。歴史的現実性が暗黙のうちに人間的存在に組み込まれるのである。アドルノは、こうしたハイデガーの姿勢を非弁証法的であるとして非難する。先述した通り、観念論以降の哲学が目指してきたのは、超越論的な理性を出発して現実の把握へ到達することであった。しかし、ハイデガーの存在論においては、本来なら生き生きとした存在であるはずの客観性は、内実を持たない空虚な概念へと切り詰められてしまう。結果として、理性と現実という対立そのものが排除されることとなる。<sup>5</sup> だがアドルノからしてみれば、この対立こそが近代の重要課題なのであり、たとえそれが原理的には解決不可能であるとしても哲学が取り組み続けねばならないもののなのである。アドルノによるこうしたハイデガー批判は、『本来性という隠語』において中心をなしているほか、彼が晩年において書き上げた哲学的名著『否定弁証法』に至るまで一貫して続けられていく。

こうしてアドルノは、思想史的な状況を省みることによって哲学が抱えている問題を先鋭化していく。彼の議論は、既存の哲学的潮流を批判するにとどまらず、哲学という学問分野そのものの存続を揺るがしかねない問題に直面する。それは、普遍的な真理を探究可能なものとして前提してきた伝統的な哲学は、このような時代においてはもはや不可能なのではないか、という疑問である。「こんにち、現存の精神的・社会的な状況から来る信頼性ではなく、真理こそが肝心だと心得ている哲学はすべて、哲学それ自体の抹消という危機に直面しているのです。」<sup>6</sup> 無論アドルノは、こうした哲学の現状批判にのみ終始しているわけ

---

<sup>5</sup> Ebd., S. 329ff. 前掲書, 10-13 頁。

<sup>6</sup> Ebd., S. 331. 前掲書, 14 頁。

ではない。むしろ、このような危機をいかにして乗り越えるべきかを提示することこそ、哲学にとってアクチュアルな課題であるとアドルノは考えているのである。上記で述べられた批判的考察は、それゆえ講演全体にとって問題提起としての位置を占めている。続く後半では、前半部において展開された議論を踏まえつつ、主体と客体の断絶を余儀なくされた現代の哲学にどのような道が残されているのかについて、彼独自の論理が披瀝されることとなる。ここで一度、考察の見通しを立てるためにも、哲学と文学の両分野における近代的な問題連関に立ち返っておきたい。

ここまでの内容からも把握される通り、主体と客体をめぐる全体性の理念の崩壊を近代に特有な課題として提示した、という意味でルカーチとアドルノの問題意識には高い親和性がみられる。だが、両者のあいだには明確な相違点も存在している。ルカーチは、小説に歴史哲学的な考察を加えることで、自我と世界の対立を近代文学形式に特有の事態として定式化した。しかし彼の議論は理想的な叙事文学形式としての古典的叙事詩を前提としたものであり、小説には叙事文学の中では劣ったものとしての価値があてがわれることになる。他方でアドルノは、自らの時代においてはもはや全体性という理念が失われてしまったことを自認しつつも、それに代わる新しい哲学的な問いの形を模索しようとする。それは、近代というものがそこに立脚しつつも常にそれを批判的に乗り越えようとしているところの、近代自身を構成する前段階から抜け出そうとする努力と言い換えることもできる。その段階とは、文学の分野においては、小説について論じるにあたってルカーチが無批判的に前提としてしまっていた擬古典主義的傾向に相当している。この意味において、アドルノの議論はより現代的な領域へ足を踏み入れたといえることができるだろう。では実際には哲学はどのようにして活路が見出すことができるのだろうか。

アドルノの言に従うならば、哲学はかつてないほど困難な状況に立たされていることになる。古典的な時代にあつては、それが実際に存在していたかどうかは別として、調和的な世界観に疑いなく安息することができた。だがそのような世界観は、はるか昔に失われてしまつて久しい。それでも近代においてはまだ、かつて存在したはずの理念を、再び取り戻すべく探求することが許された。だがアドルノは、現代においてそのような希望をもつことすら、もはや不可能であると断言する。こうした中で彼は逆説的な解決策を打診する。アドルノが今後の哲学の可能性を見出すのは、既存の認識論が規範としてきた全体性の対極に位置するもの、つまりは断片性である。

### 「意図なき現実」の解釈

哲学の将来的な方向性を示すにあたって、アドルノは既存の試みを完全に否定してしまうわけではない。そうではなく、アドルノは哲学に唯物論的契機を持ち込むことによって、

観念論的な「大きな哲学 (die große Philosophie)」<sup>7</sup>からの脱却を果たそうとする。「哲学のアクチュアリティ」を始めるにあたって哲学の危機に関して述べた時、アドルノは講演の後半で重要な役割を果たすモチーフを——暗示的にはあるが——すでに提示していた。冒頭で引用した箇所が続いてアドルノは以下のように述べている。

認識する者に対して理性がまったき現実として自らを提示するとすれば、それはひとえに論争的な仕方においてのみであって、自分がいつかは正しく公正な現実にゆきつくだろうという希望を、理性は痕跡と破片の姿でのみ認めることができます。<sup>8</sup>

「痕跡と破片 (Spuren und Trümmer)」という表現が、ひととき異彩を放っている。従来の哲学的な価値観に従うならば、ここで扱われている断片性には、部分が全体に対して持っていた劣位性よりも、より否定的なニュアンスが含まれているように思われる。なぜならこうした断片性には、多かれ少なかれ現実の認識が含まれてはいるものの、それらを一つ残らず集積したところで総体を形成するには決して至らないからである。もちろん、アドルノはここで「痕跡と破片」という表現にポジティブな意味合いを与えている。ただしそれは無批判な肯定ではなく、現代の哲学が自らにとっての希望を認めるとすればその断片性の中のみ認めることができる、という意味においてであるが。付言しておく、断片的なものうちに認識の可能性を見出そうとする姿勢は、以降のアドルノの方法的指針を規定している。翌年に行われる講演「自然史の理念」においても——表現は多少変化しているものの——「瓦礫と破片 (Trümmer und Bruchstücke)」<sup>9</sup>という言葉が見られることから、その問題意識は継続している。

それでは、こうした「痕跡と破片」は具体的にはどのようにして哲学の問題圏へと浮上してくるのだろうか。アドルノはそれを、一学問分野としての哲学を、その他の諸々の個別科学と比較することによって果たそうとする。それにより両者の相違が描き出されることになる。その際アドルノが個別科学として念頭に置いているのは、もっぱら実証主義的な価値観にもとづく学問分野である。長きにわたって学問の中心に据えられてきた哲学が、主に 19 世紀以降に相次いで勃興した個別科学によってその役割を取って代わられる危機に瀕している、というのが、20 世紀前半に哲学の置かれた状況に対して広く共有されていた認識といえる。だが、アドルノはここでそうした一般的な理解を採用しない。彼によれば、実証主義的な個別科学の存在は、それ自体として哲学の脅威となるものではない。同時に、ウィー

---

<sup>7</sup> Ebd., S. 344. 前掲書, 36 頁。

<sup>8</sup> Ebd., S. 325. 前掲書, 2 頁。

<sup>9</sup> Theodor W. Adorno, *Die Idee der Naturgeschichte*, in: *Gesammelte Schriften. Philosophische Frühschriften*, S. 360. テオドール・W・アドルノ「自然史の理念」、『哲学のアクチュアリティ』細見和之訳、みすず書房、2011 年、71 頁。



ン学派によってなされたような哲学を科学へ移行させようとする企ても、正当性を欠いている。なぜなら哲学とその他個別哲学では、所与である対象の扱い方が決定的に異なるのだから。対象を分析的に考察し、その結果を数量的な指標へと還元する自然科学は、確かに高い客観的妥当性を誇っているものの、その効力が有効なのは自らの依拠するパラダイムの内部においてのみである。こうした自然科学的認識の場には、哲学的主観が入り込む余地は存在しない。だからといって、人間の精神的、あるいは文化的営みを学問的に取り扱う機会が失われてはならない。このような対象こそ哲学にとって固有の領域であるとアドルノは主張するのである。

アドルノは、個別科学と哲学を、それぞれの学問的对象への関わり方によって対比させる。しかし、これだけでは哲学の進んでいくべき道が示されたことにはならない。なぜなら、既存の哲学が乗り越えることのできなかった、理性による現実の把握という問題はいぜん未解決のまま残されているからである。アドルノは議論をさらに先鋭化させてゆく。そのさい彼は、個別科学とは違い、哲学においては明確な結果として「成果 (Resultate)」<sup>10</sup>が与えられていないことに着目する。その原因は、哲学が自らの問いに対して導き出す回答、つまり発見がもつ特異性に帰せられる。個別科学の所与の具体性に対して、哲学の所与は暗号に喩えられる。これは、問いに対して提出される回答が哲学においては曖昧性を含んでいる、ということと関係してくる。こうした考察を経て、科学においては「研究 (Forschung)」<sup>11</sup>が、哲学においては「解釈 (Deutung)」<sup>12</sup>が、それぞれの理念として定式化される。

ここには大きなパラドクス、ひょっとすると永続的なパラドクスが存在しています。すなわち、解釈のための確かな鍵など一度も所持しないまま、哲学はたえずいつも、しかも真理への要求を掲げつつ、解釈しつづけねばならないのです。哲学に与えられているものといえ、存在者の謎めいた形象およびその不可思議な絡まり合いから、一瞬生じては消えてゆく、さまざまな暗示のみです。哲学の歴史とは、このような形象の絡まり合いの歴史にほかなりません。だからこそ、哲学には「成果」というものが与えられていません。だからこそ、哲学はたえず新たに始めなければなりません。だからこそ、哲学は以前の時代に紡がれたどんなわずかな糸もなしで済ますわけにはゆきません。ひょっとすればその糸は、件の暗号を一つのテキストに変容させてくれる、罫線を補ってくれるかもしれないのですから。<sup>13</sup>

---

<sup>10</sup> Adorno, *Die Aktualität der Philosophie*, S. 333. アドルノ「哲学のアクチュアリティ」, 18 頁。

<sup>11</sup> Ebd., S. 334. 前掲書, 19 頁。

<sup>12</sup> Ebd., S. 334. 前掲書, 19 頁。

<sup>13</sup> Ebd., S. 334. 前掲書, 19 頁。

ここでは、哲学がその思弁性によって陥らざるをえない困難が端的に言い表されている。哲学が超越論的な理性を絶対視し続ける限り、今後もその困難に陥っていかねばならないだろう。ここでアドルノは、哲学の問いの転換を試みる。つまり、個別科学において「成果」に相当するものを、いかにして哲学は獲得することができるのか、ということが問われなければならない。彼が「哲学は以前の時代に紡がれたどんなわずかな糸もなしですませるわけにはゆきません」というとき、こうした糸が示しているのは過去の哲学がもたらした結果にとどまらない。つまり哲学には、伝統的な思弁的営みに加えて、個別科学がもたらした「成果」をも自らの俎上に乗せることが求められている。いまや理性は、超越論的な主体であることを放棄し、経験的なもの、歴史的なものを自らの対象として選び取らなければならない。そうした選択によってのみ、哲学は自らが陥っている窮状を克服しうるのである。

アドルノは、哲学のこうした新たな方法を「哲学的解釈」と呼称している。しかし、哲学的認識は、経験的なものを所与として獲得する代償に、あらゆる完結性を放棄することとなる。観念論的思考がかつて求めていた全体性がもはや妥当なものでないことは、すでに指摘した通りである。それどころか、個別科学がもたらした「成果」を取り扱うからといって、実証主義科学が備えている対象の客観性が保証されるわけでもない。なぜなら、実証主義的な厳密性は、主体性が関与することによりその完結性を失うからである。けれども、厳密性を重視するあまりに哲学の思弁性が犠牲にされることがあってはならない。そういった試みは、哲学を疑似科学へと貶めることに他ならないからである。結果として、哲学的解釈における認識は、もろく壊れやすいもの、厳密な意味での客観的現実性を欠いたものとなる。しかし、素材の示すこうした断片性こそ、哲学があえて引き受けなければならないものなのである。こうした理由から、哲学的解釈の課題とは、現実に対してつねに安定した意味を見出すことではない、といえる。哲学的解釈の対象となるのは、時間の経過に曝されることで一定の形態を維持することができないような、移ろいやすさを備えた内実である。生き生きとした現在を客観的な数量へと捨象してしまう二元論は、哲学的解釈ではなく、科学的研究にこそ相応しい。普遍性を標榜する価値体系への批判的姿勢は、近代的な問題意識の現れであり、文学の領域においても共有されるべきものである。こうした価値体系は、あるときは保守的に、あるときは実証的に立ち現れてくる。哲学的解釈は、このような体系的思考から脱却することを目的とする。つまり、「哲学の課題とは、現実のもっている、隠れた形ですでに存在している意図を探究することではなく、意図なき現実を解釈すること」<sup>14</sup>なのである。このようにして、先に示された「痕跡と破片」の意味が明らかとなる。そして断片は、まさにその非完結性ゆえに、これまでの哲学が実現し得なかったような世界認識の能力を発揮する。

---

<sup>14</sup> Ebd., S. 335. 前掲書, 21 頁。



## 星座的布置の解釈

科学的研究の課題が、所与の現実を詳細に分析することによって対象のうちに隠されている事実を発見することであるならば、他方で哲学的解釈の使命は、現実の諸々の断片の中から新たな連関を作り出すことである。アドルノのいう意図なき現実の解釈とは、このような意味で理解されるべきだろう。しかし同時に、哲学的解釈が関わる現実とは極めて微妙な世界像を呈することとなる。意図なき現実とは解釈に先立って存在するのではない。つまり、現実の背後に第二の現実といったようなものが想定されており、その中から答えを見つけ出す、という性質のものではない。意図なき現実とは、正確な解釈の手続きを踏むことによって初めて現前してくるものである。換言すれば、現実に対して新たなパースペクティブを作り出すことによって、現実のポテンシャルを引き出すこと、といえるだろう。

したがって、哲学的解釈者のとる振る舞いも、体系哲学におけるような完結性を備えた記述とは異なっている。彼は無際限に与えられた現実の断片を頼りに、自らの問題意識に対して解決を提示してくれるような解釈を生み出すことに努める。例えばそれは、単体ではさしたる認識をもたらさないものの集まりから有効な組み合わせを見つけ出すことによって、あるいは、すでに存在する組み合わせを解体して未だ試されたことのない配列へと組み替えることによって、実現されるであろう。アドルノは哲学的解釈に固有のプロセスを、判じ絵を解く者の振る舞いと重ね合わせることでより具体的なイメージを喚起しようとする。哲学的解釈者が手にするのはバラバラに砕かれた現実認識からなるピースであり、彼の眼差しは、誰も解いたことのないパズルの中に未知の風景を見出そうとする者のそれである。

問いのうちに散在している個別的な要素を、そこから答えが不意に現れるとともに問いが消失するような形象へとまとまるにいたるまで、さまざまな配列でためしてみること——判じ絵の謎解きはこうして遂行されます。それと同様に哲学は、個別科学から受け取っている要素を、答えが読み取りうるような、また同時に問いが消えうせるような形象にいたるまで、さまざまに入れ替わる星座的な布置へと——あるいは、こんな占星術的ではない、最近の科学でもっと馴染みの表現を用いるなら、さまざまな実験的な配列へと——置き換えてみなければならないのです。<sup>15</sup>

「星座的布置 (Konstellation)」という奇妙な比喩が登場する。これはアドルノがベンヤミンから継承した用語なのだが、ここではアドルノ自身がベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』の参照を指示している。アドルノは「哲学のアクチュアリティ」に先立って執筆した教授資格申請論文『キルケゴール 美的なものの構築』においてもこの星座的布置という用語を採用しており、彼におけるベンヤミン受容の根強さが窺える。こうした両者の思考の近親性に

---

<sup>15</sup> Ebd., S. 335. 前掲書, 21 頁。

目を向けることは、アドルノがベンヤミンからいかに強力な影響を受けていたかを明らかにする以上に、「哲学のアクチュアリティ」においてアドルノが哲学に仮託した役割を理解する助けとなる。

ベンヤミンは、教授資格申請論文として執筆した『ドイツ悲劇の根源』の「認識批判的序章」において従来の哲学的認識を批判し、新たな真理獲得の手段を打ち出している。この序章はベンヤミン独自の言語論に加え、プラトンのイデア論、ライプニッツのモナド論を交えて展開されている。さらに、ベンヤミン独特の用語法、本編のアレゴリー論などが関わってくるため、その内容は非常に複雑なものとなっている。それゆえ、ベンヤミンのそういった試みの全てを再現しようとするのは、議論をいたずらに晦渋にしまいかねないと思われる。しかし、星座の布置というメタファーに込められた意義を読み解くことは、アドルノの哲学的解釈の内実を理解する上で欠かすことができない。それだけではなく、ベンヤミンの試みは、本論文の中心課題の一つでもある哲学と文学の親和性をより明確にするという意味でも非常に重要な位置を占めている。そこで以下では、とりわけ「哲学のアクチュアリティ」に関係する文脈に絞って、ベンヤミンの議論に言及していきたい。

「認識批判的序章」では、真理を獲得するにあたって哲学的な理念はいかにして叙述可能であるか、という疑問が出発点をなしている。ベンヤミンが問題視しているのは近代の体系哲学の著作が示す完結性であり、そこに対象を余すことなく語りつくそうとする方法の限界を指摘する。書物には終わりがあるが、思考には終着点がない。そもそも、思考の運動は単線的、あるいは均質的なものに尽きるのではなく、往々にして断続的な連続性を構成している。つまり思考とはその本質からして非完結的な運動であり、それを表現するにはそれに相応しい記述形式が用いられねばならない。ベンヤミンはそれを、近代哲学の完結的な著作に対して、中世のスコラ哲学に由来するトラクタートの概念を対置させることによって果たそうとする。トラクタートには、哲学が19世紀の体系的志向において失ってしまった秘儀的な側面が息づいている。こうした秘儀が第一に喚起するのは神学的イメージであるが、ここでベンヤミンは哲学を神秘主義へと回帰させることを目指しているのではなく、トラクタートがもつ「観想 (Kontemplation)」に哲学的叙述の可能性を見出すことである。観想は、その叙述の展開において事物の全体像を捉えることに拘泥することをよしとしない。むしろ対象を多面的に捉えようとすることに重きを置き、必要とあらば細部へと立ち入っていくことも厭わない。哲学的叙述の本領はその断片性にある。ベンヤミンは、思考において断片的なものが占める重要性について、トラクタートと同じく中世に盛えた装飾様式であるモザイクと対比させながら、次のように述べる。

気まぐれな断片に分かたれていながら、モザイクにはいつまでも尊厳が失われることなく保たれるように、哲学的考察もまた飛躍を恐れはしない。モザイクも哲学的考察も、個別なもの、そして互いに異なるものが寄り集まって成り来たるのである。超越的な力

——聖像のそれであれ、真理のそれであれ——というものを、このことほど強力に教えてくれるものはほかにない。思考細片が基本構想を尺度として直接に測られる度合いが少なければ少ないほど、思考細片の価値はそれだけ決定的なものとなり、そして、モザイクの輝きがガラス溶塊の質に左右されるのと同じように、叙述の輝きは思考細片の価値にかかっている。<sup>16</sup>

モザイクを形成する個々の断片の輝きは他の部分によって代替されるものでもなければ、単一の全体像へと解消されるのでもない。それは、全体の中に置かれてもなお、独自の異質な意味を発し続ける。ここでは、部分が全体に隷属しているのではない。逆なのだ。全体が部分によって生かされているのである。思考のモザイクについてもこれと同じことがいえる。それではこのような個々の断片的な思考から一体どのようにして理念が叙述されるのかというと、それらを配置することで生じる星座的配置においてなされるのである。

ベンヤミン曰く「理念と事物の関係は、星座と星の关系到等しい。」<sup>17</sup> 個々の星々が新たな図像を形成して星座となるように、それぞれの事象は独自の配列へもたらされることによって理念を叙述する。特筆すべきは、理念は星座的配置の形成をまって初めて生じうる、という点である。その際、星座的配置において、諸々の事象は自らの個別性を保持したまま理念の現前に寄与している。さらに、そうした配置の中に据えられることによって、それぞれの構成要素もまた新たなパースペクティヴを獲得することができる。このように、星座的配置における理念と事物の関係は、片方が他方に一方的に仕えるのではなく、相互に積極的な意味を持っている。ベンヤミンは星座的配置がもつこのような機能を「代表すること (Repräsentation)」と呼んでいる。つまり、ここで叙述される理念とは、個別の事象がもつ内実を捨象することによって導き出されるような、実証的な概念とは異なっている。理念はこうして普遍性へ近づこうとするのだが、それは、ある現象を取り出してきてそれを抽象的な概念に解消させることによって特権的な地位を与えたり、諸々の現象の総和から数量的な平均値を導き出したりして求められたりする実証主義的傾向とは明確に区別されなければならない。アドルノが哲学的解釈を論じるにあたって用いる意図なき現実という表現は、このような意味で理解されるべきであろう。哲学的解釈において経験的なものが理念的なものに関わることができるのであれば、それはもっぱら星座的配置がもたらす「代表すること」によってである。

ベンヤミンは星座的配置がもたらす理念によってこそ、真理の叙述が可能であると考え

---

<sup>16</sup> Walter Benjamin, *Ursprung des deutschen Trauerspiels*, in: *Gesammelte Schriften Band I*, unter Mitwirkung von Theodor W. Adorno und Gershom Scholem, hrsg. v. Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Frankfurt am Main, 2015, S. 208. ヴァルター・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』浅井健二郎訳、筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、1999年、19-20頁。

<sup>17</sup> Ebd., S. 214. 前掲書、32-33頁。

る。彼の議論は理論的考察にとどまることなく、『ドイツ悲劇の根源』の本編で忠実に実行へ移されている。例えば「バロック悲劇」という理念が、バロックに関する作品や批評、あるいは理論的著作からなる数多くの引用を交えた叙述によって照らし出される。こうした試みが数多く積み重ねられてゆき、それらが星座の布置を構成することによって、最終的にはドイツ悲劇の「根源」が「真理」として問われるのである。こうした理念と真理のあり方は、概念的構成要素が完結した全体性認識に対して果たす役割とは決定的に区別される。体系的思考は自身を諸概念の集積として捉え、概念は自らとの同一性のもとに対象を認識する。つまり認識はその対象を所有するように振舞うのであるが、ベンヤミンにとって真理とは所有可能なものではない。「真理は叙述された諸理念の輪舞のなかに顕現してくるのであって、認識の領域へのどのような投影によっても、真理を捉えることはできないのだ。」<sup>18</sup> それでは真理は実際にどのようにして現れてくるかということ、「作品の燃焼 (eine Verbrennung des Werkes)」<sup>19</sup>によってである。アドルノが哲学において全体への問いを放棄し、個別的な現実とその可能性を見出したように、ベンヤミンもまた現実的なものである芸術作品を手掛かりに真理を求めようとする。ベンヤミンが所与として前提しているのはとくに文学作品である。ベンヤミンが構想する真理獲得の理論は、ひとまず文学批評という形で実現される。彼は『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』のなかでフリードリヒ・シュレーゲルとノヴァーリスといった初期ロマン主義者たちに焦点を当てることで、独自の批評概念を取り出す。こうした芸術批評の理論を、ベンヤミンは「ゲーテの『親和力』」において本格的に実践しているのだが、その冒頭で自身の批評観について改めて言及している。そのさい彼は、上述の「作品の燃焼」のメタファーを用いることによって、自らの意図するところである批評を、注釈の概念から区別しようとする。

ひとつの比喩として、成長してゆく作品を炎をあげて燃える薪の山と見なすならば、その前に立つ注釈者は化学者のようであり、批評家は錬金術師に似ている。化学者にとっては木と灰だけがその分析の対象であり続けるのに対し、錬金術師にとっては炎そのものが謎を、生き生きとしてあるものがもつ謎を秘めている。そのように批評家は真理を尋ねるのだ。かつて在ったものという重い薪と、体験されたものという軽い灰の上で、真理の生き生きとした炎が燃え続けている。<sup>20</sup>

真理とは作品のうちに含まれているのではない。真理は作品が自らを燃焼させて生じて

---

<sup>18</sup> Ebd., S. 209. 前掲書, 21-22 頁。

<sup>19</sup> Ebd., S. 211. 前掲書, 26 頁。

<sup>20</sup> Walter Benjamin, *Goethes Wahlverwandtschaften*, in: *Gesammelte Schriften Band I*, S. 126. ヴァルター・ベンヤミン「ゲーテの『親和力』」, 『ベンヤミン・コレクション 1』浅井健二郎他訳, 筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉, 1995 年, 42-43 頁。

くる炎の中に現前してくるのである。それゆえ、作品を文献学的な観点から取り扱う注釈者にとって真理とは縁遠いものである。薪を前にした化学者が木と灰の分析に心血を注ぐのと同様に、注釈者の関心の対象はもっぱら素材的事実、つまり事象内実に限られる。彼において文学作品に反映された作者の体験が何らかの意味を持つとすれば、伝記的事実との関わり合いにおいてであろう。他方、錬金術師である批評家が炎の中に見出しているものこそ、作品の真理内実には他ならない。真理の炎の内に、作品を形成する個々の素材は元来の経験的な次元から解き放たれ、理念の星座の布置を構成している。その中で、現実的な体験は抽象化を伴うことなしに普遍性へと昇華される。

アドルノが哲学を個別科学から区別するにあたって、哲学に解釈を、科学に研究を、それぞれ割り当てていたことを想起されたい。アドルノにおける研究と解釈は、ベンヤミンが批評を述べる際にもちいる「化学者-注釈者」と「錬金術師-批評家」の關係に酷似している。ここでは、研究は「化学者-注釈者」に、解釈は「錬金術師-批評家」に、それぞれ比せられる。アドルノが哲学的解釈に要請する問いの消失という事態も、このような文脈において理解できる。だが、意図なき現実の解釈という理念について語っただけでは、アドルノは未だ理論的な議論の域を出ていないことになる。ベンヤミンは自らが提示した真理獲得のプロセスを文学作品の批評によって実践した。それでは、アドルノは哲学的解釈を如何にして実現可能と考えているのか、このことが以下で尋ねられねばならないだろう。

## エッセーという形式

哲学における理性と現実のあいだの深淵を止揚するため、理性は観念論的な思考を放棄しなければならない。超越論的な主体が否定され、理性は現実の領域に踏み込むことを余儀なくされているからである。すでに述べたように、アドルノは個別科学の成果を哲学の所与として設定することで、この課題を克服しようとする。ただし、所与に経験的な性質を与えただけでは、問題を根本的に解決するには不十分である。というのも、同語反復的な言説、反省を加えられることなく無批判に流布してしまっている言説を認めることはアドルノにとって本意ではないからである。こうした事態を回避するべく、哲学的解釈に唯物論的な指針が与えられる。唯物論においてこそ、断片的な思考はその本領を発揮するのであり、意図なき現実を解放することができる、とアドルノは考える。超越論的な形象が拒否された場所では、象徴はかつての機能を果たすことができない。象徴は、かつては特殊なものに普遍的な意味を表象させることであたかも全体性が保証されているかのような錯覚を引き起こし、観念論に原動力を与えていたのであるが。いまや哲学的解釈は象徴と袂を別ち、哲学は観念論から唯物論へと移行する。象徴的な形象に特有の無時間性、永遠性は失われ、哲学の対象は時間の流れの中に身を置くこととなる。こうして「歴史的な図像」が哲学的解釈の所与に据えられる。それは、刻々と変化する現実の断片である。

断片的なものを採用することの利点として第一に挙げられるのは、偽りの全体性があらかじめ排除されている、という点である。哲学にはもはや超越論的に前提された模範像の中に解答を尋ねることは許されない。しかし、それでは断片性のもつ特異性の一部を言い表しているに過ぎない。断片を用いることのより大きな意義は、素材の現実性ゆえに、唯物論的弁証法の実践を可能にするということに尽きる。そのような所与は、それ自体としては問題を含んでいるのだが、哲学的な解釈を加えられることにより問題へのアンチテーゼが掲げられ、当初の問いの消失が志向される。つまり、アドルノの歴史的な図像はベンヤミンの「認識批判的序章」における理念に相当している、といっても差し支えないだろう。諸々の歴史的図像を組み合わせ、星座の布置を構成することが哲学的解釈に課せられたプロセスである。こうした歴史的な図像の解釈を示す例として、アドルノは社会学をあげて説明する。社会学が自らの法則に則って現実を分析することによって生じた成果を、哲学は所与として受け取る。<sup>21</sup> 個別科学が客観的厳密性を保ちつつ現実と接するのだが、哲学は主観的理性を携えてそこへ参入する。社会学の提出した問題に反省が加えられ、現状を止揚するようなパースペクティヴが探求される。こうして研究と解釈の理念は明確に区別される。ただし、その際に注意すべきであるのは、慣習的な規範に引き寄せられ、現状追認的な解決策に落ち着いてはならないということである。主体が持ち込んだイメージを客体に反映することは認識論的には無意味な同語反復であり、アドルノが理性の欺瞞として厳しく批判するところである。理性は主体と客体の微妙な緊張関係の中へ身を置くことではじめて現実と適切に関わることができる。

断片的な思考を体現する哲学的解釈にとって、従来の観念論における体系的な記述は対極に位置する。というのも、完結しているということは変化の余地を許さないということであり、部分がもつはずの生き生きとした性質を押し殺してしまうからである。これに対して、細部の輝きを重視する思考が自らを映し出す形式は断片的なものでなければならない。こうした必要性を感じ取ったベンヤミンはスコラ哲学に由来するトラクタートという形式に哲学的叙述の可能性を認めた。それに習うような形で、アドルノは自らの哲学的解釈を実践に移すための形式としてエッセーを導入する。そのさい主たる役割を果たすのが「想像力(Phantasie)」<sup>22</sup>である。理性は想像力を以って対象に省察を加えるが、そこには諸科学の成果が所与として前提されている以上、無根拠な空想ではない。これはアドルノ自身が言及していることだが、観念論によって理性が自らの内に閉じこもってしまう以前の哲学者たちであるベーコンやライブニッツは、思考の力によって現実を獲得しようと試み、その思弁の軌跡をエッセーという名の下に著した。近代以前の、哲学と科学が未だ明確に分化していなかった頃の知の営みが想起される。またアドルノはエッセーという形式の内に、哲学のみなら

---

<sup>21</sup> Adorno, *Die Aktualität der Philosophie*, S. 340f. アドルノ『哲学のアクチュアリティ』, 29-31 頁。

<sup>22</sup> Ebd., S. 342. 前掲書, 33 頁。



ず文学批評的な意味合いも読み取っている。これは、彼が後年「形式としてのエッセー (*Der Essay als Form*)」において代表的なエッセイストとしてジンメル、ルカーチ、カスナー、そしてベンヤミンの名を挙げていることから明らかであろう。<sup>23</sup>こうして哲学は美学の領域へと接続される。エッセーにおいて、哲学的解釈と文学的解釈が合流し、哲学と文学、学問と芸術を隔てていた境界はいよいよ曖昧なものとなる。エッセーとは、その語源的な意味が示すように、ジャンル規定に従わない分野横断的な試みであるといえる。彼のこうした姿勢は、「形式としてのエッセー」においてエッセーを学問と芸術の中間的な存在に位置付けていることとも一致する。エッセーという形式の内には、観念論的な完結性も、自然科学的な客観性も、もはや見当たらない。同時に、哲学はかつて誇っていた厳密性を手放さなければならぬ。とはいえ、こうした断片性は、現代において理性があえて現実との関わりを維持しようとする以上、甘んじて受け入れなければならないものである。ルカーチが小説を近代に特有の文学形式として定式化したように、全体的な問いの正当性がもはや保証されていない時代の哲学にはエッセーこそ相応しいとアドルノは考える。アドルノは「哲学のアクチュアリティ」を以下のように締めくくる。

大きな哲学におけるあらゆる確実性の崩壊とともに、美学の領域で大胆な試みが開始されるならば、そしてその試みが、美学的エッセイのもつ、限定され、輪郭の際立った、非象徴的な解釈と結びついているならば、対象が的確に選ばれ、その対象が現実のものであるかぎり、弾劾されるべきものとは私には思えません。といいますのも、たしかに精神は現実の総体を生み出したり、現実の総体を把握したりすることはできませんが、微細な姿で侵入し、微細な一点で、現に存在しているものの尺度を破壊することができるからです。<sup>24</sup>

微細なものへ向けられた眼差しはアドルノのマイクロロギー的関心を如実に表している。哲学の試みは大きな問いから小さな問いへと姿を変える。全体性を喪失した時代の哲学は、エッセーの断片性によって生き延びるのである。

---

<sup>23</sup> Theodor W. Adorno, *Der Essay als Form*, in: *Gesammelte Schriften. Noten zur Literatur*, Bd. 11, hrsg. v. Rolf Tiedemann unter Mitwirkung von Gretel Adorno, Susan Buck-Morss und Klaus Schultz, Frankfurt am Main 2015, S. 9f. テオドール・W・アドルノ「形式としてのエッセー」、『文学ノート1』三光長治他訳、みすず書房、2009年、3-4頁。

<sup>24</sup> Adorno, *Die Aktualität der Philosophie*, S. 344. アドルノ『哲学のアクチュアリティ』、36頁。

## おわりに

「哲学のアクチュアリティ」において、アドルノは近代という主題の一面を見事に切り取ってみせる。その中から見えてくるのは、近代という時代において絶大な影響力を誇っていた認識論的な価値観の崩壊という事態である。現実認識の媒体は、完結的な全体性から断片的な個性へと移行する。近代的主観性は、自らの眼前で現実が断片化していく過程を目の当たりにする。もはや個別なもののしか残されていない現実において、未だに欠けるところのない完全な存在を要求するのであれば、それは理性の傲慢ということになるだろう。こうして、伝統的な哲学が保持してきた現実への志向性は、対象を喪失する。自らを対象へ同一化する理性が無効を言い渡されることになる。こうした哲学に対して、アドルノはエッセーという形式を提示する。これにより、哲学は超越論的な理性の呪縛から解き放たれ、断片的なものを通じて現実を対象に据えることが可能となる。これまで不純物として扱われてきたもののうちにこそ、現実の可能性が宿るのである。

近代を舞台に生じた世界観の転換は、哲学のみならず文学にも妥当する。哲学における「理性-現実」の対立が、文学における「自我-世界」と並行関係にあることは既に述べたが、アドルノのエッセーへの接近により、哲学と文学の親和性はより明確になる。観念論的な全体性に呼応するように、擬古典主義的な完結性が批判の対象となる。これにより、ルカーチの『小説の理論』において堅固であった擬古典主義的価値観、つまり、叙事文学の優劣を決定するのは作品の完結性である、という固定観念は揺るがざるをえない。小説を特徴付けている断片性や散文性といった近代的要素は、当初は異分子として叙事文学の中に登場する。しかしこの異分子は、次第に老朽化を重ね、最終的にはもはや立ち行かなくなった固定観念を突き破ることによって、自らの正当性を証明するのである。絶対精神が自らの作り出した現実性に到達できなかったように、擬古典主義が掲げた理想もまた、虚構の産物であったことが明らかになる。しかし、ここで注意しなければならないのは、擬古典主義的価値観そのものが批判の対象となっているのではない、という点である。以上の議論をもって、擬古典主義に優越する価値を小説に与えようなどという意図は毛頭ない。ただ、作品における完結性を絶対の判断基準とするような価値観を、小説のような近代に成立した文学形式にまで適用することは擬古典主義の越権行為といわざるをえない、というだけのことである。これによって始めて、小説を正當に評価し得る地盤が用意されることとなる。

ある時代において新たに文化的現象が生じる場合、それは不可避的に既存の価値観の影響下に置かれる。他方、兼ねてから存在している支配的観念もまた、新たな要素の出現によって、何かしらの変化を被ることになる。このような、互いに対立しあう原理が一つの文化的地層を形成する、という傾向は、近代という時代を極めて明確な形で規定している。そして、このような点に近代の見極め難さがある。小説の成立過程は、こうした近代性の葛藤を体現している。ルカーチは、擬古典主義的なアポリアに陥りはしたものの、類稀なる慧眼によって小説の姿を歴史哲学的に描き出すことに成功している。小説という形式のうちには、

近代的主体が体験した動揺が反映されており、それは具体的には、世界から疎外された自我として現前してくる。哲学において物象化に相当すべきこの事態を、ルカーチは「世界の散文化 (das Prosaisch-Werden der Welt)」<sup>25</sup>という言葉で表現する。散文と断片は、かつての支配的な価値観においては、全体的理念の同一化から零れ落ちた不純物として、小説の不完全性を示す基準とされていた。しかし、こうした同一化が空虚な反復だということが明らかとなった今、それは無意味な否定性ではなく、その中から意義深い解決が引き出されるべきである。だが、この問題に立ち入っていくためには、「哲学のアクチュアリティ」の翌年に行われた講演「自然史の理念」の議論を俟たねばならない。その際アドルノは「自然史」という概念を導入する。自然史とは星座的配置と同様にベンヤミンから援用した用語であり、「自然-歴史」とも表される。議論の焦点は、理性と現実の対立から自然と歴史の関係へと移行することとなる。

---

<sup>25</sup> Lukács, *Die Theorie des Romans*, S. 576. ルカーチ『小説の理論』, 135 頁。

## **Modernität in Adornos Vortrag „Die Aktualität der Philosophie“ — Zur Affinität zwischen Philosophie und Literatur**

Akira HOTTA

In dieser Arbeit beziehe ich mich auf Theodor W. Adornos *Die Aktualität der Philosophie*. Dabei fokussiere ich auf das Problembewusstsein des Verlusts der Ganzheit, das Philosophie und Literatur gemeinsam ist, und erläutere die Affinität zwischen beiden. Am Ende möchte ich Adornos Thesen auf die Diskussion der Modernität in der Literatur ausdehnen.

Georg Lukács betrachtet in der *Theorie des Romans* die Epik geschichtsphilosophisch und formuliert, dass das klassische Epos in der Moderne zum Roman übergegangen sei. Zugleich ging im Roman der modernen Literatur das harmonische Verhältnis zwischen Ich und Welt verloren, das man einst im Epos finden konnte. Deshalb kritisiert Lukács den Roman, weil ihm die Totalität fehle. Eine ähnliche Situation der Ich-Welt-Spaltung war auch in der Philosophie vor sich gegangen. Am Anfang des 20. Jahrhunderts war die systematische Philosophie, die der deutsche Idealismus ausgebildet hatte, bereits gescheitert. Es war eine drängende Aufgabe für die Philosophie, die Trennung zwischen Idee und Wirklichkeit zu überwinden.

In Adornos *Aktualität der Philosophie* geht es um ebendieses Problem. In vorliegenden Aufsatz wird untersucht, welche Philosophie in der Gegenwart möglich ist, nachdem die Idee der Ganzheit bereits verloren scheint. Anders als Lukács, der auf der Ganzheit besteht, fokussiert Adorno auf das Fragmentarische und will dadurch den Abgrund zwischen Idee und Wirklichkeit vermitteln. Dabei wird der Begriff der „Konstellation“, die er von Walter Benjamin übernommen hatte, berücksichtigt. Adorno hält dafür, dass es wahre Erkenntnis nicht im unveränderlichen Bild des Ganzen, sondern gerade in der Zusammenfügung fließender Fragmente gebe. Er stellt sich konträr zu der überholten Idee, dass in der Ganzheit die Wahrheit liege.

Wenn die Philosophie in der Vermittlung durch das Fragmentarische die Idee sucht, sollte sie auf die bisherige geschlossene Darstellungsweise verzichten. Adorno betrachtet den Essay als spezifische Form der gegenwärtigen Philosophie. Die Philosophie nähert sich in ihrer Methode der ästhetischen Sphäre. Und die offene Ausdruckform entsteht nicht nur im Bereich der Philosophie, sondern auch im Roman der modernen Literatur. Aus diesem Grund sollte der Mangel an Totalität im Roman, der von Lukács kritisiert wurde, als Modernität der Literatur angesehen werden. Die Form des Romans kann eine Welt projizieren, die im Fortgang der Zeit fragmentarisch geworden ist.